専大校友を訪ねて

在シカゴ日本国総領事館 職員　**松本（まつもと） 久代（ひさよ）さん**（平17文）

# 友好の懸け橋に　米国人向けに情報を発信

在シカゴ日本国総領事館で、米国人向けに日本の文化や習慣を紹介する広報業務に就く。2016年から現地の政治・経済に関する情報収集やレポートの作成業務に従事した後、現在は広報文化センターに籍を置き、SNSでの情報発信や各種催事の企画・運営に携わる。シカゴは大阪市と姉妹都市提携を結ぶ〝お笑いの街〟でもあり、落語家を招いたイベントはとりわけ盛況だった。

シカゴに多数進出する日本企業が、雇用の創出や現地材料の使用を通じて地域経済に貢献していることをPRすることも領事館広報の重要な役目だ。「仕事で地方を訪れると歓迎されることが多く、日米が草の根レベルで非常に良好な関係にあることが分かる。今後も両国の友好関係促進に尽力したい」と力を込める。

一方で海外での仕事は多様な価値観を持つ人たちとの共同作業になるため難しさもある。「日本での常識は海外では通用しない。意思の疎通を図るためには、対話を重ねて考え方の違いを埋める作業が不可欠」と話す。苦労が多いぶん物事を成し遂げたときの達成感は大きく、それが海外で働く醍醐味（だいごみ）と笑顔で語る。

現在グローバルに活躍する松本さんの原点は専大時代にある。元々海外志向があったが、3年次の後期から卒業まで、当時の国際研修館で寝食をともにしながら留学生をサポートするレジデント・アシスタントを務めたことで、将来の目標がより明確になった。「海外を身近に感じられる環境に身を置いたことで英語力が伸び、視野も広がった」と、当時を振り返る。

専大卒業後、イギリスの大学院で「開発経済」を学び、現地で就職。旅行で訪れたギリシャにほれ込み、ギリシャの日本大使館に勤務した。その後シカゴに渡った松本さんは、長い海外生活のなかで日本の素晴らしさを再認識したと話す。これから羽ばたく専大生に「日本人であることに誇りを持って、広く世界で活躍してほしい」とエールを送るとともに、「趣味や好きなことを入り口にすると英語は楽しく学べる。専大には留学や語学習得を支援する体制が整っているので、それらもぜひ活用してほしい」とアドバイスする。

ベンチャービジネスコンテスト

# 鳳賞に西岡さん

第19回専大ベンチャービジネスコンテストのプレゼンテーション大会が11月28日、神田キャンパスで開かれ、最優秀賞にあたる鳳賞に西岡貴史さん（商4）が選ばれた。

今回は26組が応募し、書類審査と事前プレゼン審査を通過した10組が本選に臨んだ。出場者は、本学OBの起業家ら14人の審査員に渾身のビジネスプランを披露した。

西岡さんは、宿の魅力を手軽に発信できるプラットフォーム「宿ふぁん」を提案した。ターゲットはSNSプロモーションに課題を抱える中小規模の宿泊施設で、ITが苦手でもサービスを利用できるように、シンプルな設計にするなど使いやすさにこだわった。

作成した画面を表示しながら熱くプランを説明する西岡さん

最大の特徴は、同じ趣味のフォロワーを多く持つマイクロインフルエンサーを情報発信の担い手として活用する点。「苦境に立つ宿泊施設に光を当て、宿のファンづくりを通じて日本の観光を盛り上げたい」とアピールした。

全国120軒以上の宿に足を運びインタビュー調査を行った西岡さん。「自分の足で集めた〝現場の声〟がプランの説得力を高め、結果につながった」と喜ぶ。

このほか、伝統工芸品の販路拡大を後押しするプランを提案した白石亮さん（経営3）のチームが優秀賞を、新しい切り口の「シェアハウス紹介アプリケーション」を考案した川上拓朗さん（ネット情報2）のチームが育友会長特別賞を受賞した。

リーダーシップ開発プログラム

# 6チームが成果報告

「専修リーダーシップ開発プログラム――第8期・蒼翼の学舎」の最終報告会が12月17日、生田キャンパスで開かれた。

同講座は、経営学部の授業科目（全学公開科目）とキャリアデザインセンターが行っている課外講座のハイブリッドプログラムとして展開しており、受講生は毎週2コマの学内での連続講座と、企業や市民団体と協力した学内外でのテーマ活動に参加する。理論と実践の両面からリーダーシップの体得を目指す受講生を、前年度までのプログラム修了生が「チューター」として支援する点も特徴の一つ。

今年度は30人の受講生が6チームに分かれ、オンラインと対面を使い分けながらテーマ活動に挑んだ。報告会では、約8カ月におよぶ活動の様子や、そのなかで見つけた自分たちなりのリーダーシップが、熱い言葉で語られた。

専大センチュリーチームは、専修大学購買会が販売する「専茶」のプロモーションのほか、購買会の今後の広報活動への提案も行った。報告会では「活動を通じて、他者のオープンマインドを確立するための傾聴の重要性を学んだ」と発表した。

島根チームは、島根県アンテナショップ日比谷しまね館でイベントを開催。島根県と縁を結んでもらおうと、水引細工のアクセサリー作りのワークショップを行い、島根県の観光スポットを紹介した。メンバーは「目標達成に向けワンチームで物事を進めていくことの大切さを学んだ」と活動を振り返った。

専茶の新ラベルを提案した専大センチュリーチーム

島根チーム開催のワークショップ＝10月31日

外国語のススメ　外国語教育研究室

― 89 ―

宮田　宗彦
国際コミュニケーション学部准教授
（外国語教育研究室長）

# 外国語の学習法について

「外国語を学ぶ一番の勉強法は何ですか？」

このような質問を受けることがあります。世の中にはさまざまな外国語の学習法があります。学校教育で広く行われる訳読中心の学習法をはじめ、会話学校などで取り入れられているコミュニケーション中心の学習法など例を挙げることができます。

しかしどの学習法が最も効果的かということを決めることはできません。「語学に王道なし」と言われるように最も効果的な学習法が存在するわけではないのです。しかし逆に言えば、どのような学習法にも効果はあるのです。

一見異なるさまざまな学習法に、共通する特徴があることが明らかになっています。その特徴の一つは理解優先ということです。外国語で聞くこと、読むことに触れ、意味の理解を優先することで、習得が起こります。

もう一つは聞くこと、読むことに触れた時、それらに対して表現する機会を持つことにより習得が起こります。理解のためだけに聞いても読んでも、単語の意味さえ分かれば文の大体の意味が分かることが多いので、細かい言葉の形式のところまで注意がいきません。ところが表現するとなると細かいところまで注意がいかないと表現できない。聞くこと、読むことの理解と共に、表現するために必要な言葉の形を学ぶ機会をたくさん持つということです。

これらの特徴を持つ外国語学習法であれば、どのような方法でも効果が期待できます。そしてどれだけ多くの機会を持つことができるかでその効果が測れるでしょう。

（応用言語学〈第二言語習得・英語教育学〉）

短縮版。全文はCALL教室ホームページで。

# キャンパス・ハラスメント対策室を知っていますか？

Stop Campus Harassment！　ハラスメントのないキャンパスへ

私たちが暮らしている社会――仕事や勉学の場では、複数の人が集まり、意図するorしないにかかわらず、人が人を傷つけたり不利益や不快感を与えてしまうことがあります。大学において、力関係を利用したいじめや嫌がらせ、人の尊厳や人格を傷つけるような行為をキャンパス・ハラスメントといいます。これは教員と学生、職員と学生、教員と職員、教員同士、職員同士等、さまざまな主体間で起こり得ます。

このような行為は、時として人を絶望の淵に追いやり、抱いていた夢や希望を打ち砕いてしまうこともあります。人の言動が凶器となり、将来の可能性や人生のビジョンを変えてしまうこともあるのです。しかしこのような事態は、少し意識や行動を変えることで防げる場合もあります。

威圧的な言動、陰湿ないじめや嫌がらせによって大学に来るのがつらくなってしまったとき、ぜひキャンパス・ハラスメント対策室の存在を思い出してください。対策室は勧誘したり、賑わったりする存在ではありませんが、キャンパスの皆が心の片隅にその存在を知っていてほしいのです。大学に行くのがつらくなったとき、一人で悩んでいないでその存在を思い出してください。つらい状況や悩みを発することによって防げることもあります。対策室は、いつもは閑散としている方がいいですが、いざという時に心の片隅にある「交番」のような役目を果たせればいいと思っています。

（キャンパス・ハラスメント対策室員・植田　敦紀）